様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２１３０

研究課題名（和文）韓国の中等教育機関における校内英語定期テスト問題データベースの構築

研究課題名（英文）Constructing a database of item types in English tests conducted at high schools in Korea

研究代表者
静　哲人（SHIZUKA, Tetsuhito）

大東文化大学・外国語学部・教授

研究者番号：６０２７０２１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,600,000円、（間接経費）　780,000円

研究成果の概要（和文）：韓国の高校定期テスト問題の項目タイプを分類し、学校間での類似性、科目間での類似性、大学修学能力試験（修能）との類似性について、カイ二乗検定、相関分析、主成分分析などで分析した。その結果、科目間の違いは見られたが、学校間の違いはほとんど見られず、選択式問題に関しては修能との類似性が明らかになった。定期テストに出題されている項目タイプで修能に出題されていないものはあったが、逆に修能に出題されている項目タイプで定期テストに出題されていないものは皆無だった。大学入試として実施されている統一試験の社会的重要性が高校の定期テストに強力な波及効果をもたらしている例だと解釈される。

研究成果の概要（英文）：Midterm and final examination papers conducted for four English subjects ("English" "English I" "English II" and "English Reading" at three high schools in Korea were collected and the types of items contained in them were analyzed and categorized. The types of items turned out to be quite similar across schools but some differences were revealed across subjects, with more global-comprehension items and fewer word-knowledge items in "English Reading" for third-year students than in the other subjects. The Korean SAT English papers were also analyzed and it was revealed that all of the item types that appeared in the Korean SATs also appeared in the midterm and final examinations. The results are interpreted to indicate strong backwash effect from the high-stakes statewide examinations to teacher-made classroom tests.

研究分野：英語教育学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語テスト　項目タイプ　定期テスト　大学入試　韓国の英語教育　波及効果　大学修学能力試験

１．研究開始当初の背景

（１）母語の言語的距離が英語からかなり遠く、（２）英語が外国語として学習されている、という２つの点で、日本と韓国は英語学習に関して意味のある比較が可能な二国であると言える。

実際に 1990 年代あたりまでは、両国とも同様に英語が「苦手」とされていた（瀬戸，2011）。しかし現在では英語学習に対する取り組みやその成果において韓国がリードしていることを示唆するデータや逸話は多い。

一般論として、ある社会においてある言語が単に学校における教科として学習されているのみで、その社会において実際に使用されることがほとんどあるいはまったくない場合には、その学習対象言語に関してどのようなテストが行われているかが、その言語がどのように学習されるかに大きな影響を及ぼすと考えられる。

２．研究の目的

韓国の大学入学統一英語試験である「大学修学能力試験」（以下、「修能」）についてはすでに我が国にたびたび紹介されている（根岸，1997；樋口，2003；本名，2004；石川，2004；太田，2005，東條，2013 など）。しかしその前段階として高校生がとりくんでいるはずの、学期中間試験、学期末試験などの校内試験の姿に関する情報は乏しい。そこで韓国の高等学校においてどのような英語試験が実施されているのか、どのような問題が出題されているのかに関する実地調査を行なうこととした。

同じ EFL 環境にある韓国でどのような英語達成度試験が行われているかを知ることは、我が国の英語教育に資する部分があろうと考えたからである。

３．研究の方法

データ収集は 2011 年 6 月と 9 月の 2 回、韓国ソウルを訪れて行なった。6 月には A 高校、9 月には B 高校と Y 高校と、合計 3 校を訪問し、それらの高校で過去に実施した定期テスト問題の提供を受けた。A 校から 12 セット、B 校から 32 セット、Y 校から 4 セット、合計 48 セットの提供を受けた。ここでセットとは、たとえば「英語Ｉ　１学期中間テスト」などのまとまったひとつのテストを指す。

調査を計画した段階では３校よりもかなり多くの学校を訪問し定期テスト問題を収集する予定であったが、結果的には３校のみとなった。その理由を記しておく必要がある。まず物理的にそれ以外に問題提供してくれる学校が見つからなかった。しかしさらなる協力校を探そうとする努力を中止してもよいだろうとの判断に至ったのには、より根本的な理由がある。それは後に詳しく見るように、A 校、B 校、C 校で収集した問題の外見上の形式が驚くほど類似しており、これ以上別の学校からの収集を続けてみても、大きく異る問題形式が出てくるとは考えられなかったということである。学校が異なっても問題形式がかなり似通っているという印象について、B 校でテストを提供してくれた担当教員に尋ねたところ、韓国では修能が決定的に重要なので、各学校は定期テストの形式もできるかぎり修能に合わせて作っており、その結果、自然と問題形式が似通ってくるのだとのことであった。つまりそれ以上データ収集を続けても問題のパターンは基本的には増えないことが予想された。このような理由から、データ収集は３校で打ち切り、収集できたデータを整理、分類する作業に入ることとした。

４．研究成果

(1) 問題形式の分類結果

選択式問題については以下のカテゴリーに分類できた。

<テクストのグローバルな理解／言外の意味の理解> 全体の 10%

MC01［要旨 L1］ テクストの主題・要旨・題名・目的などを、L１選択肢から選ぶ

MC02 ［要旨 L2］ テクストの主題・要旨・題名・目的などを、L2 選択肢から選ぶ

MC03［心情 L2］ テクストの話者の心情・人物の性格・文章の雰囲気などを L2 選択肢から選ぶ

MC04 ［要約空所］ テクストの要約文の２箇所の空所に入る語の組み合わせを選ぶ

<テクストのローカルな理解。該当箇所指定せず> 全体の 16%

MC05［一致 L1］ テクストの内容と一致している/一致していない L１文を選ぶ

MC06［一致 L2］ テクストの内容と一致している/一致していない L２文を選ぶ

MC07［英問英答］ テクストの内容についての L2 問に対する答えを L２選択肢から選ぶ

MC08［図画一致］ テクスト内の文・語句で図や絵と一致しないものを選ぶ

<テクストのローカルな理解。該当箇所を指定> 全体の 7%

MC09［下線 L1］ テクスト内の表現の意味を表す／表さない／例示する／例示しない L１表現を選ぶ

MC10［下線 L2］ テクスト内の表現の意味を表す／表さない／例示する／例示しない L2 表現を選ぶ

MC11［代名詞］ テクスト内の代名詞を含む語句（複数）の照応先が異なるもの等を選ぶ

<テクストの流れの理解。構造復元系> 全体の 18%

MC12 ［文挿入］ テクスト中で、ある文を挿入すべき箇所を選ぶ

MC13 ［文整序」 ひとつのまたは複数の文を単位とした正しい並べ方を選ぶ

MC14 ［文削除］ テクスト内で、文脈的に不要な文を選ぶ

<テクストの総合的内容理解。クローズ系> 全体の 24%

MC15 ［単一空所］ テクスト内のひとつの空所に入る／入らない語・句・節を選ぶ。
MC16［意味空所］ テクスト内の複数の空所に入る適語（意味が焦点）の組み合わせを選ぶ
MC17［談話指標］ テクスト内の複数の空所に入る「談話マーカー」の組み合わせを選ぶ
<テクスト内での語彙知識系> 全体の 7%
MC18［語彙適否］ テクスト内の語・語句のうち、意味的に適切／適切でないものを選ぶ
MC19［語義定義］ テクスト内の内容語の定義で誤っている／正しいものを選ぶ
MC20［語義例文］ テクスト内の内容語と同じ／異なる意味でその語が用いられている例文を選ぶ
<文法・語法系> 全体の 17%
MC21［語形適否］ テクスト内の語・語句のうち語法・語形が誤っている／正しいものを選ぶ
MC22［語形空所］ テクスト内の複数の空所に入る適語（語法・語形が焦点）の組み合わせを選ぶ
MC23［機能異同］ テクスト内の機能語と同じ／異なる使い方でその語が使われている例文を選ぶ
<その他> 全体の 1%
MC24 ［その他］ 選択式で上の範疇に当てはまらないもの

(2) 学校別に違いがあったか

前セクションに記したのは、３校の定期テスト問題をすべてあわせた場合の傾向であるが、もうひとつの興味は、学校によって出題傾向に違いが見られるか、という点である。そこで A 校、B 校、Y 校のカテゴリーグループ別の頻度を分析対象として、カイ二乗検定を行なった。結果は $\chi 2\ (14) = 22.184$ 、$p = .0749$ であった。すなわち学校とカテゴリーグループの間に有意な関係があるとは言えない。つまり A 校、B 校、Y 校の間で違いがあるとは言えないということである。

(3) 科目間で違いがあったか

次に「英語」「英語１」「英語２」「英語読解」という科目間での違いも検定したところ、カイ二乗統計値は、$\chi 2(21) = 65.802$, $p < .0001$ で、有意である。すなわち４つの全ての科目におけるカテゴリー毎の分布が等しいとはいえない。そこで次に、どの部分が科目毎の違いに貢献しているのかを調べるため、セル毎の標準化残差を検討した。その結果、英語２はグローバル系のアイテムが特段に多く、語彙知識系のアイテムが特段に少なく、英語１においては語彙知識系のアイテムが特段に多い、という傾向が判明した。

(4) 修能との比較

定期テストと修能のカテゴリー分布・割合を比較したところ、次の３点が判明した。
① 修能は３年間に渡って問題形式の分布はほぼまったく同じであり、経年的に極めて等質である。
② 修能に含まれる問題形式はすべて定期テストに出題されているが、逆は真ではない。つまり問題形式のバラエティにおいて定期テストは修能を包含している。
③ カテゴリーグループ毎の割合に関しては修能と定期テストは等しいとは言えない。修能はグローバル系の割合が定期テストの３倍ほども多く、文法・語法系が３分の１ほども少ない。

(5)考察

以上の結果からまず言えることは、韓国の高校定期試験は修能の影響を想像以上に強く受けているということである。「影響を受けている」を超えて、問題形式においては特に３年生科目になると修能を可能な限り模倣しようとしていると言ってもよいと思われる。これは作成者に対する聞き取り調査からも示唆されていたことだが、修能にあって定期テストにない問題形式はなかったということで、今回のデータでも裏付けられた。これは韓国の高校生にとって修能がほぼ唯一の重要な筆記試験であることを考えると十分納得できる現象である（大学個別の試験はほとんどが面接と小論文であるという韓国の教育状況は前に触れた通りである）。形式が同じ問題を解くことが、そのような問題に対応できる英語力を育てるのか、という本質的な議論は脇に置くとしても、そこまで high stakes なテストを受験する高校生を指導する教師が、日頃の定期テストにおいてその high stakes テストを模した形式を使用するのはもっともであろう。

翻って我が国では同様の現象は見られない。高校の定期テストが大学入試センター試験の問題形式をそっくり模倣したものになってはいない。それは大学入試センターが特に国公立大学の受験生にとって重要な試験であることは間違いないが、修能と違って「唯一の」重要な試験ではないからである。個別の大学が実施する２次試験ではセンター試験とは異なる形式の問題が出され、しかもそれらの形式が大学ごとにかなり異なっているため、高校側としても定期テストをある特定大学の形式だけに合わせて出題することはそれほどの利益がないし、現実的ではないからである。特定大学の形式に合わせてということではなく、センター試験には出されず個別大学の２次試験に出される形式、とくに英文和訳の形式を、定期試験にも取り入れている現象が見られる。

どういう試験を模倣のターゲットにしているかは違うが、生徒にとって high stakes である上級学校への入学試験を真似して校内定期試験を作っているという点では韓国の高校も日本の高校も同じであると言える。つまり大学入試の形式が高校の定期試験に対して良くも悪くも波及効果を及ぼしてい

るという構図は共通なのである。ではその波及効果は良いものか、悪いものなのか。

ある問題形式が受験者にとってまた英語学習者にとって、望ましい波及効果を持つのか望ましくない波及効果を持つのかを、万人が同意するような客観的な視点から判断することは事実上不可能であろう。筆者個人は20年以上前から、大学入試における英文和訳問題の存在自体を批判し、その撤廃を訴えてきた（静，1990；2002a；2006a；2006b）が、状況から考えて未だに大多数の出題者の同意は得られていないようだし、日本の英語のテストでは日本語の能力をも測定するのが当然だとする論者さえいる。客観的に見て、少なくとも予見しうる将来において、この点について合意が得られる可能性は極めて低いと言える。よって以下に記すのは筆者個人の主観である。

韓国の修能の場合、高校の定期試験に及ぼしている影響は「良い」ものである。修能の良い点は第１に、英文韓訳つまり英語を読ませて母語に直させる問題が含まれていないことである。もちろん修能はすべて選択式であるので記述問題としての英文韓訳が出題されていないのは当然である。しかし選択肢問題としても特定の英文を指定してそれを韓訳した場合を想定して選択肢を設けるといった、いわば英文韓訳の選択式バージョンもない。そのような問題は我が国の大学入試センター試験にはないが、個別の私立大学の入試問題には、「下線部を日本語に訳した場合に最も適切な日本文はどれか」といったいわば選択式の英文和訳問題が皆無ではないし、国公立大学の２次試験には記述式の英文和訳問題はないほうが珍しい。受験生が準備しなければならないのが大学入試センター試験だけではない日本では、それ以外の個別大学の入試が高校の英語教育にも大きな影響を及ぼしているのは間違いない。そして英文和訳が事実上のnormになっていることが、なぜ高校生の英語学習に対して負の影響を及ぼしていると考えられるのかは別に（静，2002a）詳しく論じたので、ここでは要点だけ記す。英語を読むことが母語に訳すことと同義になってしまうと、特に語順が英語とまったく違う言語を母語とする学習者には有害でさえある。訳を書きつけるという作業のために目標言語習得にはあまり関係のない無駄な時間を使ってしまう。また英語の語順のまま理解する習慣が形成されず、リスニング能力の向上も妨げる。韓国の高校生は大学入学に際して修能が事実上唯一の重要な筆記テストであり、そのテストがすべて選択式であって英文韓訳の記述問題がないことによって、英文韓訳を練習するという作業から解放されているのは、彼らの英語力向上のために大変幸福なことである。

修能の良い点の第２は「グローバル」系のアイテムが 34%と高い割合を占めていることである。グローバル系のアイテムとは、ある文章全体から読み取れることとか、文章のトーンとか、筆者の心情などを答えさせるものである。百数十語程度の「中文」を一気に読んでその概要や言外の意味を読み取ることを求める問題は、学習者が樹ではなく森を見るよう仕向けるものであり、本質的な意味で望ましい読み方を促している。樹を見て森を見ない読み方を促す下線部英文和訳とは対極をなす形式であり、我が国でももっと取り入れられるべきであろう。

今回の調査は全体として、上級学校への入学試験が下級学校での教育にいかに強力な波及効果を持つのかを改めて印象づける結果となった。とくに、その上級学校への入学試験が唯一の試験である場合、その影響はほとんど絶対的なものである。筆者は以前、大学入試を英語教育界の「プレデター」に喩えたことがある（静，2002b）。食物連鎖の最上位に位置するプレデターには、その地位に見合った大きな責任が伴う。韓国の場合は、優れたプレデターが連鎖のより下位にいる存在にプラスの影響を与え、連鎖全体が好ましい状況になっているというケースではないかと個人的には考える。

折しも我が国では高校英語教育に関して「英語の授業は英語で行うことを基本とする」という方針が打ち出された。中学に関してもその方向に進みつつある。授業を英語で行うならば、和訳が入り込む余地は基本的にはないはずである。そうであればその延長線上の当然の帰結として、「英語のテストは英語で行うことを基本とする」としなければ矛盾をきたすであろう。テスティングはティーチングを反映したものでなければならないからだ。高校入試から英文和訳が消えれば中学の定期試験からも英文和訳は消えるだろうし、大学入試から英文和訳が消えれば、高校の定期試験からも英文和訳は消えるだろう。

引用文献

石川慎一郎（2004）．日韓の大学入試英語問題に見る構成語彙の特徴：英文テキスト・コーパスの解析に基づく考察．『アジアの英語と英語教育』(JACET 中国・四国支部アジア英語研究会)，7，1-15．Retrieved from http://language.sakura.ne.jp/s/ilaa/ishikawa_20040930.pdf

太田耕軌（2005).日韓大学入試問題(英語)の比較--大学センター試験(日本)と修学能力試験(韓国)を題材として.『天理大学学報』56，2，35-44．Retrieved from http://e-lib.tenri-u.ac.jp/infolib/www/_com/pdf/GKH/GKH020803.pdf

静哲人（1990）．大学入試問題の改善：和訳させずにこうしたら？『現代英語教育』6月号，40-41.

静哲人（2002a）．『英語テスト作成の達人マニュアル』東京：大修館書店.

静哲人（2002b）．プレデター大学入試の変身．『英語教育 Fifty』(『英語教育」創刊50周年記念別冊』，64．
静哲人（2006a）．これでいいのか、大学英語入試問題--英語教育およびテスト理論の立場から．『英語青年』 4月号，2-5．
静哲人（2006b）．もう本当に和訳はやめて欲しい．『英語教育』6月号，41．
瀬戸久美子（2011）．子供たちが狂喜する韓国「英語村」に潜入：設備と運営にかかる巨額コストと、その効果は？日経ビジネスオンライン．Retrieved from http://business.nikkeibp.co.jp/article/manage/20110627/221143/
東條加寿子（2013）．授業の玉手箱:「韓国の英語教育」に思う．『大阪女学院・大阪女学院短期大学 教員養成センターNewsletter』，8，4．
Retrieved from http://ir-lib.wilmina.ac.jp/dspace/bitstream/10775/2699/1/2013015.pdf
根岸雅史（1997）．韓国の大学修学能力試験（1997年度）を見て．『現代英語教育』11月号，24-26．
樋口晶彦（2003）．韓国修学能力検定試験は果たして妥当な読解力テストか？：大学センター入試(1999,2000)の読解構文パターンと韓国修学能力検定試験(1997,1999)との比較分析．『鹿児島大学教育学部研究紀要．教育科学編』，54，43-57．
Retrieved from http://ir.kagoshima-u.ac.jp/bitstream/10232/838/1/KJ00000689940.pdf
本名信行．(2004)．アジア諸国における英語教育の取組み．文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語専門部会第3回会議議事資料．Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04052601/004.pdf

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（1件）

静哲人(2012)．韓国の高校で実施される英語定期試験の内容と形式．第38回全国英語教育学会愛知研究大会口頭発表(予稿集 pp. 462-463)．愛知学院大学日進キャンパス．

〔その他〕（1件）

静哲人(2014)．韓国の高等学校英語定期テストの項目タイプ- 大学修学能力試験からの波及効果か -
https://sites.google.com/site/zukesdownloadsprt2/home/kaken2011

６．研究組織

(1)研究代表者

静哲人（SHIZUKA Tetsuhito）
大東文化大学・外国語学部・教授
研究者番号：60270211